

※インターネット「はらまち九条の会」で、「九条はらまち」の全号を見ることができます。



九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 9 7

2009(平成21)年4月26日(日)発行

山吹・秋

＜『ロビンソン漂流記』で有名なイギリスのジャーナリスト・小説家のデフォー(1660～1781)の命日＞

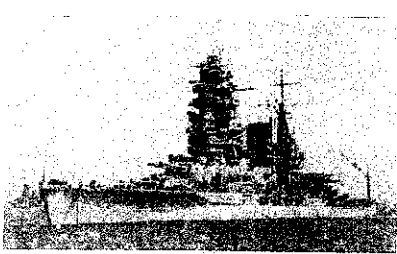


○「ここ無人島では、私に使えるだけの量のものしか、価値がなかった。私が食べてゆくのに十分なだけの食料と、その他の需要をみたすための材料以外は、私にとって意味をもたなかった。私に食べきれぬ量以上の肉を手に入れば、犬か野獣に食わせるほかはなかった。同様に……私が切り倒した木は、地面にくちかけていて、薪にしか使えず、薪がいるのは料理をする時だけだった。一口にいえば、私は経験によって、この世にあるどんないいものでも、我々がそれを使える範囲でしか、我々にとって価値がないことを知った」(『ロビンソン漂流記』)



▲レイテ湾海戦は、昭和19年10月23～26日のフィリピンのレイテ島争奪をめぐる日米間の大海戦。日本は戦艦「武蔵」をはじめ連合艦隊の主力を失う大敗北でした。＜上写真＞はレイテ島に上陸する米軍。

この戦いで原町出身の中野磐雄さんは、10月25日、初の神風特別攻撃隊「敷島隊(しきしまたい)」5名の2番手として出撃し戦死します。



▲布川さんが、横須賀港で整備要員として乗艦した戦艦「長門」。「長門」は山本時五十六が乗船し、太平洋戦争開戦の旗艦「ニイタカヤマノボレ1208」を打電した艦(司令官の乗る中心の戦艦)でした。

昭和 次第に戦争への道を
大正十四年、南相馬市の旧石神村北長野に生まれました。その年、治安維持法公布、普通選挙法案議会議案通過。世界恐慌や東北地方の冷害など、大正ロマンの影は薄く、昭和六年満州事変、十一年二・二六事件、十二年支那事変と戦線を拡大。国家総動員法公布で政党解党。大政翼賛会は文化思想団体の政治活動を禁止。
昭和十五年原町陸軍飛行場建設が着工になり、私も相馬農蚕学校(相馬農業高校)生徒として奉仕作業に従事。畑の土をトロロッコに積んで運び平坦地にする作業を一年ぐらい行いました。

十六年東条英機陸相が「戦陣訓」を通達。そして太平洋戦争布告。
昭和十七年、中等学校は三月卒業を繰上げ十一月となって、外地へ就職する者もあつた。私もこの時、相馬農蚕学校を卒業しました。
広島海軍潜水学校に入校
昭和十九年五月、軍国少年の使命感からか、徴兵検査を待たずに兵役志願する者が多くなり、小生も一年早く海軍機関兵として広島県大竹の海軍潜水学校に入校した。大竹は広島県の西端、厳島を目前にする軍事の町でした。
そこで「空気の味と太陽の有り難さ」を猛訓練で実体験することとなった。



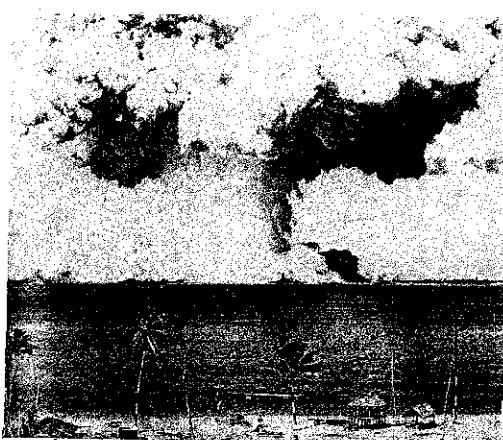
戦艦「長門」の整備要員に

原町区大町 布川雄幸

戦艦「長門」の整備要員として
昭和十九年十月、レイテ沖海戦に出撃するため、小沢艦隊が瀬戸内海の柱島に集結した。航空母艦「瑞鶴(ずいかく)」、戦艦「伊勢」「日向(ひゅうが)」などの雄姿が今も臉に浮かぶ。
しかしフィリピン・レイテ沖海戦は世界海戦史に残る惨敗に終わり、十二月戦艦「長門」が軽傷で母港横須賀に帰港した。私はその整備要員として三ヶ月間乗艦した。

「ボツダム宣言」予告ピラ

二十年五月、特殊潜航艇整備要員として神奈川県三浦半島の大楠(おおくす)海軍機関学校に入校した。八月、B29からボツダム宣言の予告ピラが三浦半島上空に撒かれた。(裏ページへ)
戦艦「長門」は敗戦直後に米軍に接収され、昭和二十一年七月ビキニ環礁での原爆実験の標的艦として撃沈された。左写真の原子雲の左手に「長門」の姿が見える。現在は皮肉にも、観光ダイビングの人気スポットになっている。



相双地区九条の会が合同でバスを出します!

堤 未果 (つづみ みか) さん講演会

演題: 貧困大国アメリカの未来

～真のチェンジをおこすものとは～

なぜアメリカで世界金融恐慌が起こったか。アメリカの責任は?

・とき: 5月24日(日)午後1:30～4:15

・会場: 会津若松市会津風雅堂 主催: 福島県九条の会

〇バスとチケット代一人3,500円。希望者は事務局早坂

TEL22-0326へ、5月19日まで、お申し込みください。

〇バス時刻: 新地町役場前7時半→相馬市8時(スポーツアリーナさうま)→鹿島町8時半(JAさうま本店)→原町区9時(6号線道の駅)→小高区9時半(6号線セブンイレブン)→浪江10時(6号線セブンイレブン)経由で。

(表のページより)

「軍人は武装解除して、皆故郷に帰って職場に復帰できる。」と書かれていたが、上官は慌てて回収させていた。またその頃、海軍伝統だった「根棒」が禁止となった。上官はもう日本の敗戦を知っていたのか。八月二十五日、アメリカ艦隊の相模湾入港を前に退去、私も原町に復員となった。そして、日本海軍のシンボルだったあの戦艦「長門」は二十一年七月ビキニで原爆実験艦となって沈められた。私の義父も海軍に応召しマリアナなどで戦ったが、「負ける戦ほど残酷なものはない」というのが口ぐせでした。

(はらまち九条の会) 会員



民報 サロン

(15) 2009年(平成21年)4月16日(木曜日)

旅から見えてくるもの

朝倉 悠三



人は生まれた瞬間から「やむなき旅人」として、さまざまに旅している。ならば「のんびり」「楽しい旅人」にならねばならないか。わたしと女房は大病を経験したこと。もあって、遊び、旅行は迷わず即決。飛び出すのは早い。

哀(かな)しいかな。へそ曲がりのわたしは、ついつい裏側の風景ばかり気にかかってしまう。美しい風景や華やかな街歩きながら、嗚呼(ああ)、ここに至るまでどれほどの血と汗と涙が流されたことだろう。余計なことを考えてしまう。

ある南国の透き通る海と青い空。卒業旅行なのか、日本人の若いグループがキャーキャー黄色い声を上げながら波打ち際ではしゃぎ合っているのを見た時、一応ほほ笑ましくは映った。でもね、あなたたちは知っているのだらうか。このきれいな海を真っ赤な血で染めて、何十万人もの若者が無念の死を遂げていった事実を。旧

式の鉄砲を持たされて、食料も弾丸もなく、雨あられの銃弾を浴び、折り重なるように倒れていったさまを...

岸だったような気がしたのだ。ゲームの中の残酷な殺し合いに夢中になっている今の若者たちに、あの悲惨な戦争実録を見せてあげたいと強く願うのは、わたしばかりではあるまい。

「じいばあさんと孫との旅」を続けて四年になるが、沖繩に行った時もやはり心に重いものが残った。民間人を含め二十万人も犠牲になった地で、どうして晴れ晴れとはしゃげようか。洞窟(どうくつ)に追い込まれた極限状態の女子どもたちの悲惨な光景は、今のわたしたちには想像すらできない。

散々ふさげ合っていた小学生の孫たちも、ひめゆり部隊の歴史館ではさすがに、ひめゆり部隊の歴史館ではさすがに、

がに神妙に見入っていた。広島市の原爆資料館では、焼けただけ少女の写真の前からしばらく離れられないでいた。「連れてきて、よかった」と思う瞬間であった。

国内外を問わず、共通して見えてくるもの。それは、人間の素晴らしさと愚かさではなからうか。古来、人間はその時代の叡智(えいち)を振り絞って、見事な教会を、寺院を、城を、彫刻を、そして街をつくり上げてきた。そして、それをことごとく破壊し続けてきた。そんな人間の哀しさが浮き上がって見えてくるのも、旅ならではのことであろう。人間の歴史は、戦争の歴史とも言えるべきか。

領土拡張と宗教上の対立から、憎しみと報復が繰り返され、人々はただ戦いにおびえ、翻弄(ほんろう)され続けてきたのだ。こんな時、神も、仏も、キリストも、イスラムも、ヒンズーも、あらゆる「神」すべてを受け入れちゃう、おおらかな日本に生まれてきてよかったなアーといつづくと思う。

人間は本来、無一物。鳥や猫や馬や羊たちのように、大自然に逆らわず生きていたいものである。彼らには名譽も、宗教も、こだわりもないから、憎しみをもって殺し合うことは決していないのだから。(南相馬市鹿島区、画家)

右の「コラム」は『福島民報』の四月十六日掲載「民報サロン」の「コピー」です。筆者の朝倉悠三さんは鹿島区の画家で、本会の会員。本会シールの「鳩を抱く少女」の絵やデザイン、また昨年五月三日の憲法記念日に、南相馬市の四つの「九条の会」では新聞に意見広告を折込みましたが、そのイラストも朝倉さんに描いていただいたものです。